

大学から地域に広がる クライミングによるまちづくり

スポーツ・健康まちづくりデザイン学生コンペティション2025

山陽小野田市立山口東京理科大学
薬学部薬学科3年 西岡 玲南

ターゲット

山口県山陽小野田市



ココ

特徴・課題

- ・自然や歴史に恵まれる一方で若者の流出や地域活性化が課題
- ・地域における大学生の存在感が大きい
山陽小野田市の人口 56845人(2025.8.1時点)
山口東京理科大学の学生数 1840人(2024.5.1時点)
市の人口のうち、本学の学生が占める割合は約3.2%

市民の約30人に1人が
山口東京理科大の学生！



→大学を中心としたまちづくりが効果的！

- ・学生と地域住民の交流の場をつくることで
コミュニティの活性化
- ・健康増進、教育、観光など多面的な効果が期待できる

スポーツクライミングに着目

スポーツクライミングの3種目について



↑リード競技
ロープとハーネスを用いて
高さ約15mの壁を
どこまで登れるかを競う



↑ボルダリング競技
高さ4~5mの壁で
決められた課題を
クリアできるかを競う



↑スピード競技
高さ15mの世界共通の
ルートをどれだけ早く
登れるかを競う

3競技のうち、ボルダリングに特に着目！

- メリット
- ロープが不要で手軽に取り組める
 - 初心者・子どもも挑戦しやすい
 - 仲間と楽しめ、自然に交流が生まれる

＋さらに

大学の外壁など**既存スペースを活かす**ことで
手軽に導入でき、持続的な運用も可能に！



スポーツクライミングの現状と山口県との関わり

山口県にあるスポーツクライミングのクラブチームから
これまでに日本代表選手を12名輩出
→山口市に公共の大きなクライミング施設があることが背景にある

さらにオリンピック競技として注目を浴びたことによる
スポーツクライミングの知名度アップ
→都会を中心に民間のスポーツクライミングジムが増加

しかし...

山陽小野田市に民間のクライミングジムは存在せず
取り組める環境がない
また公園=子ども向け 商業ジム=クライマー向け(高コスト)
という現状がある

→もっと気軽に大学生や地域住民が取り組める
クライミングウォールが大学にあれば良いのでは...?!

スポーツクライミングを取り入れることによるメリット

1. 身体も頭も使うスポーツ
筋力・バランス・柔軟性だけでなく、課題を見て
効率の良い登り方を考える思考力も鍛えられる
2. 戦う相手は自分自身
他人との比較ではなく、挑戦するプロセス自体を
楽しめる。また自身の成長を実感できる。
3. 誰でも楽しめ、新たな交流が生まれる
子どもから大人、障がいの有無に関わらず楽しめ
新たなコミュニティが生まれるきっかけとなる

提案

校舎の外壁をクライミングウォールに！

位置：キャンパス入口近くの校舎の外壁

規模感：縦 約3m, 横 約10m

クライミングウォール：高さを抑えた横移動型(トラバース)の導入

→壁を上方向ではなく横方向に進むボルダリングのスタイル。

落下の危険が少なく、安全に挑戦することが可能になる。

特徴：・屋根の設置 →雨が降っても壁、ホールド、マットを守れるように。

- ・マットの設置→安全のため。折りたたみ可能なマットを
随時ひくようにするのよ。

- ・多数のホールドを設置

→様々な年代の方が挑戦しやすく上達度に合わせて

自分たちで課題(登るためのコース)を設定できるようにするため。

安全対策等、利用についての案

利用システム

- ・特に予約システム等は設けず、学生や地域の方が
自由に利用できる開放型とする
- ・授業やイベント等での使用時は大学側へ事前連絡制とする
- ・道具を準備し、レンタル可能にする

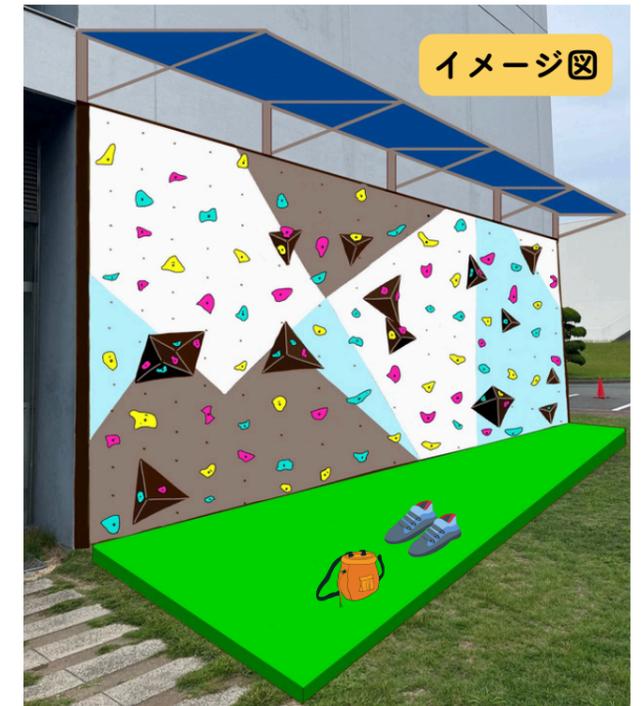
安全面

- ・雨天、夜間など危険が伴う状況では安全面から使用を禁止する
- ・マットの設置、見守りの徹底などの安全ルールを定める
- ・誰もが安全に使えるように利用ルールを掲示したポスターを設置

管理

- ・定期的に学生を中心としたスタッフで点検・清掃を実施する
- ・学生主体で運営し、利用者の意見を取り入れながら改善していく
仕組みづくりを行う

安全面については専門の方と相談しながら常時改善していくこととする。



イメージ図

クライミングウォール導入によるロードマップ

1 大学での試行

大学内でのクライミングウォールの設置
学生が日常的に使える運動の場へ

2 学生生活への定着

授業でのクライミングウォールの活用
学生サークルでの使用
学生による運営、管理

3 地域との交流へ拡大

休日を中心に地域住民にも解放
→大学を訪れるきっかけに
地域の健康づくり、交流拠点に
まで成長させることが目標

4 街全体への展開

大学でのクライミングウォール導入を
きっかけに山陽小野田市の
代表的なスポーツとして
スポーツクライミングを発展させる

将来の展望

4 街全体への展開

地域との連携強化

- ・学部を超えた連携
→薬学部と工学部が協力しクライミングウォールを利用した教育・研究・健康増進活動を展開
- ・大学間のつながり強化
→近隣大学とも連携し、学生が交流・体験できるイベントを実施
- ・地域との協働
→山口県山岳・スポーツクライミング連盟と連携し県全体で大学クライミングウォールの発展を推進

生涯スポーツとしての発展

- ・誰もが楽しめる環境づくり
→障がいの有無や年齢を問わず、安全に挑戦できる工夫を取り入れ、ともに楽しめる場を創出
- ・多様な能力の育成
→体力だけでなく、判断力・集中力・自己挑戦力など多様な能力を身につけることができる
- ・「山陽小野田市＝スポーツクライミング」のまちへ
→誰もが参加できるクライミング活動を通じて市の代表的なスポーツへと発展させる

地域創生のモデルケースへ

将来的には、大学の敷地を活かしてクライミングウォールを増設し、国際大会や代表合宿が開催できるレベルの施設へと発展。これにより、県内外から人が集まり山陽小野田市の新たな魅力と活力の創出に繋がる。

山陽小野田市での取り組みをモデルとして、同様の課題をもつ他の地方都市に向けた展開を見据える

ターゲット層と利用イメージ

1 大学での試行

ターゲット：大学生

- ・授業での活用
→登り方を考えることで問題解決能力を強化
- ・個人のトレーニングや健康維持の手段として活用
- ・学年や学部を超えて学生が集まる“新しい交流拠点”に
- ・学生主導のクライミング体験イベントの開催
→学生が主体性や協働力を育む機会となる

2 学生生活への定着

3 地域との交流へ拡大

ターゲット：地域住民

- ・地域の小中学生が参加できる大学生主体のクラブチームを創設
→大学生が教えることで世代を超えた交流が生まれる
- ・地域の方向けにクライミングウォール開放デーを実施
→地域の方が大学を訪れる新たなきっかけに
→運動習慣がつくことで健康寿命の延伸にも貢献

大学クライミングウォール導入における課題点

都市部を中心に、多くの大学でクライミングウォールの導入が進められている。しかしその一方で、設置後に十分に活用されず、利用が低迷する事例も見られる。

継続的に利用される仕組みづくりや
大学ならではの空間を活かした工夫が求められる。

大学クライミングウォールを用いたイベント案

大学×地域×学生の連携プロジェクト

- ・市と協力した健康増進イベント
山陽小野田市と連携し、大学近隣の竜王山のハイキングと学内クライミングウォール体験を組み合わせた地域イベントを実施。地域住民と学生が共に体を動かすことで健康促進だけでなく地域交流の場としても活用できる。

継続的な使用のための工夫

オンラインシステムの活用

- ・課題(登るためのコース)シェアのフォーマットづくり
学生またはクライミングウォールを利用した地域の方が自分で作った課題や登り方を記録・共有できるフォーマットを作成。利用者同士の交流を促進し、継続的な利用へとつなげる。
- ・デジタルランキングボード
挑戦者数や達成ランキングをデジタル上で可視化することでまた挑戦したいと思わせるような仕組みづくりを行う。